

## 博 士 論 文 要 旨

題 目

長期臥床患者の拘縮手の清潔ケアに関する研究

Study on hygienic care for contracted hands of bedridden patients

指導教授 川島 和代 教授

入学年月 平成 20 年 4 月 入学

学籍番号 n0807601

氏 名 中田 弘子

### 【緒言】

長期臥床患者の拘縮した手指の清潔ケアでは、ヌメリや独特の異臭を経験する。手の汚れや臭いは不衛生であるということだけではなく、患者や家族の QOL を低下させるので問題は大きい。著者らの研究結果では拘縮手の衛生状態は不良であり、その汚れは通常の入浴ではほとんど改善せず、手浴または入浴時の入念な手指洗浄では有意( $p<0.05$ )に汚染度は低下するが、その効果はいずれも 2 日間程度であった。つまり、拘縮手の清潔を維持するためには少なくとも週 3 回以上の手洗いが必要であると思われるが、臨床では十分な頻度で実施できない現状がある。看護の現場では手浴等のケア不足を補い、洗浄後の手指の清潔をできるだけ維持するため看護・介護職の経験知によりハンドロールを用いたケアが実践されている。手指の過度な密着や湿潤を防止し、汗や汚れを吸着するためにロール状にしたタオルやガーゼを手掌部に把持させる。しかし、こうしたケアの実態は十分明らかではなく、標準的なケア方法やガイドライン等は示されていない。また、清潔ケアとしてのハンドロールの効果に関するエビデンスも十分には得られてはいない。

一方、看護師が手指の清潔ケアを行えない理由として物品の不備も指摘されている。洗面器を使用した側臥位での手浴は、対象者にとって苦痛な肢位となるため安楽性が低下すること、看護師が手浴で負担に感じることは患者を安楽な姿勢で手を容器内に入れられないことが明らかとなっている。手指に拘縮がみられる患者では、手浴はより一層困難となる。こうした清潔ケア用具の不具合が指摘されながらも、これまで手浴専用の用具の開発例はみられなかった。手浴方法や用具が改善されることにより、より安定的な手指ケアの実施に繋がることが期待できると考える。

### 【研究目的】

本研究は長期臥床患者の拘縮手の衛生性の向上を目指し、以下の 3 点により、拘縮手の清潔ケアに関してエビデンスを確立すると共に、拘縮手の清潔ケア方法の提案に繋げることを目的とした。

- I. 長期臥床患者の拘縮手への清潔ケアの実態を明らかにし、清潔ケアの課題を検討する。
- II. 拘縮手にハンドロールを用いることの清潔保持効果を検証し、ケアの根拠を明確する。
- III. 患者の安楽性と看護者の利便性をより高める手浴専用用具を開発し、提案する。

#### 【方法・結果・考察】

I. 全国の療養型病棟における拘縮手の清潔ケアの実態を明らかにするため、ランダムサンプリングした 987 施設に対し質問紙調査を実施した。回収は 590 病棟分(回収率 59.8%)であった。入浴回数が週 2 回の病棟は約 7 割、手浴が週 1 回以上実施されている病棟は約 6 割であった。ハンドロールは 98%の病棟で使用されていた。ハンドロールを使い捨てにしている病棟は 1 割程度であり、多くは職員により再生されていた。ハンドロールを毎日交換している病棟は 4 割程度であった。拘縮手の清潔ケアの困難感では、洗いにいと回答した看護師が最も多く、次いでハンドロールの脱着が困難なことであった。これらの結果から、ハンドロールを用いるケアの効果の検証、拘縮手の洗浄を容易にするための手浴用具や方法の検討、拘縮手の特性を考慮したハンドロールの検討等が課題となった。

II. 拘縮手に対するハンドロールの汚染防止および防臭に与える効果を客観的に明らかにするため、手指拘縮がみられる 65 歳以上の入院患者 20 名(女性 16 名、男性 4 名)を対象に、3 種類のハンドロール(タオルをロール状にした通常のハンドロール、指間部もカバーする指股付ハンドロール、緑茶葉を入れたハンドロール)の効果を検証した。これら 3 条件にハンドロールなしを加えた 4 条件を実施した。20 名の患者に対し、これら 4 条件すべてを各条件の実施順序が偏らないようにランダムな順序で実施した。拘縮手に手浴を実施した後、各ハンドロールを 3 日間使用した。ハンドロールの汚染防止効果は ATP 拭き取り検査法、防臭効果はニオイセンサー法で評価した。通常および指股付ハンドロールでは、使用開始から 3 日目の臭度に有意( $p<0.05$ )な低下がみられた。さらに指股付ハンドロールでは、臭度に加えて汚染度にも有意( $p<0.01$ )な低下がみられた。これに対し、緑茶葉入のハンドロールの衛生効果については、本研究では明確な結果は得られなかった。これはニオイセンサー法による臭気評価の特性が関係している可能性が考えられる。

III. 手浴専用用具を開発し、実用性を検討した。看護・介護職のインタビュー分析から従来の洗面器の問題を明確にし、そこから手浴ベースンに必要な要件を整理、デザイン・開発を行った。試作したベースンを臨床モニターにより評価した。その結果、従来の洗面器に比べ手を湯の中に深く浸漬できること、ベースンの形状が患者の体にフィットすることにより安定した状態でケアができること等が評価された。手浴ベースンが臨床の看護実践に活用されることにより、手浴の効果性や効率性だけでなく患者、看護師の安楽性を少しでも高めることが期待できると思われる。

本研究は、これまで廃用として見過ごされがちであった長期臥床患者の手指の衛生状態の改善を目指し、常に看護の現場に即したアプローチにより研究を推し進めた。本研究の成果は、拘縮手の清潔ケア方法を改善すると共に臨床の看護技術の発展に寄与できると考える。